

---

# の女神と の娘

真咲 楓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

の女神と の娘

### 【Nコード】

N7303X

### 【作者名】

真咲 楓

### 【あらすじ】

ありがちな異世界トリップ……はいいんですが、なんでマツパの男達の真っ直中!?

あらゆる乙女の味方(その代わり全ての男は抹殺対象)であるアテナに保護されて平和な毎日を送っていたユカリ。けれどある日、全くの濡れ衣でヘラの怒りを買ってしまった!…え?ここどこですか?天界じゃないって、どういう冗談?しかも声、出ないんですけど!!どこからどう見ても美女にしか見えない英雄アキレウスに保護され、男嫌いの女の子がアテナの元に帰ろうと奮闘するお話。アポロンが

変態なのは仕様です。

## 1 男なんて滅びればいいのに

世の中、大抵のことは突然起こる。

赤ん坊が生まれてくる時も、女の子の生理が始まる時も、男の子の精通が始まる時も、たまに人を好きになることも。

病気になることも、お気に入りの洋服を見つけることも、そう、大抵のことは「突然」で済まされる。

しかし、いくらなんでもあれはないだろうと、ユカリは後から思い返すためにため息をつくのだった。

\*\*\*\*\*

つるり、がさがさがさ、ざばん！

その時の状況を音で説明するならこうだろうか。  
とりあえず、ありえないとだけ先に明言しておく。

彼女が落ちた小さな崖の下には、池はおろか水たまりなどないはずなのだから。しかも温かい　お湯だなんて！

何だかいい香りのするお湯の中でざばざばともがいていると、力

強い腕で引き上げられた。

「珍しいこともあるものだ。人間ではないか」

「ほう、どれ」

「なるほど。確かに人間の乙女だ」

咳きこむ合間に、そんな会話が頭の上でされている。それにつられて、ユカリはそろりと顔を上げた。

そう、上げてしまったのだ。

それがすべての始まりとも知らずに。

「……………っ、きゃあああああああああ！！！」

そこにあつたのは、男の裸、裸、裸、裸、見渡す限りの男の裸体。視界に強烈な肌色の嵐に、彼女は反射的に悲鳴を上げていた。

動きにくいお湯の中を必死に逃げ回っても、腕は次から次へと伸びてくる。

顔を上に上げればにやけた男の表情。下を向けば人生で初めて見る性器の群れ。

伸びてくる腕は時折その性器を握らせたりもして、未知の感覚に全身鳥肌が立った。

ユカリはといえば、花の高校生、青春真っ盛り。上から下までびしょ濡れで、身体の線がはっきりと目立ってしまっている。

それがまた恥ずかしくて、必死でもがき続けた。



## 2 目覚め

薄手のカーテンから差しこむ柔らかな光が、一人の少女を包んでいる。大きく豪華なベッドに横たわる彼女は、真っ白なシーツに埋もれて、静かに瞼を閉じていた。

艶のあるまつすぐな黒髪が白いシーツに広がり、抽象画のようなコントラストを描いている。閉じられた瞼を縁取る睫は長く、精巧なビスクドールを思い出させた。

白い肌。薄く色づいた唇。

今にも動き出しそうなそれは、しかし固く閉ざされたままだ。

床も天上も調度品も、全てが大理石でできた真っ白な部屋の中で、彼女だけが漆黒を纏っていた。

やがてその部屋に、ニンフ達が滑るように入ってくる。

カーテンを開け、水差しや着替えを手にした彼女達は、一様にこやかな表情で少女を囲んだ。

「おはようございます、ユカリ様」

朝でございませよ。

最も少女に近いニンフが、そっと彼女の肩に触れる。人形のように身じろぎ一つしなかった彼女の瞼が、小さく震えた。

ゆっくりと開かれた瞼からのぞいた瞳の色は、やはり黒。

大きな瞳が完全にあらわになると、彼女はゆっくりと微笑んだ。

「おはようございます、皆さん」

意志の強そうな、涼やかな声。けれど喜色を含ませたそれは、とても柔らかく響いた。

そしてまた、一日が始まる。

\*\*\*\*\*

ユカリは人間だ。しかも、日本人。

そんな彼女が何故、仮にも神の端くれであるニンフにかしずかれているのかは、ユカリ本人にもわからない。

けれど、一様に好意的に接してくれる彼女達に、ユカリはそれ以上の好意を示していた。

美しいものを見つければ、彼女達に見せに行き。おいしいと感じた果物を、みんなで分けて食べ。

身の回りの世話をする者とされる者、その垣根を越えて交流していた。

薔薇の花びらを散らせた洗面器で顔を洗い、ふわふわのタオルで

丁寧に拭われる。その後の肌の手入れも、ニンフ達が競うようにして念入りに行う。

それを黙って人形のように受けているユカリは、しかし柔らかに微笑んでいた。

これもまた、毎朝の光景。

たつぷりとドレープを作ったキトンは、一体何でできているのだろうか。シルクよりも格段に肌触りが良く、しかし羽のように軽かった。

化粧台に腰掛けたユカリの髪を、ニンフの細い手が器用に結い上げ、そこに生花がいくつも飾られる。

「相変わらず、美しい漆黒の御髪。指触りも最高ですわ」

「白い花がよく栄えますわね」

「せつかくの桃色の唇を、紅で隠してしまうのは惜しいこと。軽く蜜を塗るだけにしておきましょう」

「せつかくの大きな瞳ですもの、もっと華やかにしてさしあげなければ」

「お粉も少して結構ですわね、これだけきめの細かいお肌ですもの」

口々にユカリを褒めながら、ニンフ達は好きなように彼女を飾りあげていく。けれどそのセンスに間違いはなく、黒髪に生けられた花々は、真珠のように彼女を彩っていた。

西洋人と比較すると幼く見える容貌も相成って、ユカリは海から打ち上げられた人魚姫になったような錯覚を覚える。

「ユカリ様、今日もお似合いですよ」

「ありがとうございます」

笑顔で礼を言ったユカリに一礼し、ニンフ達が静かに部屋を出て行った。姿鏡で自分の格好をチェックして、ユカリは彼女達の仕事の完璧さにため息をつきたくなる。

薄く施された化粧。睫の一本一本まで、くるんと上を向いている。もちろん、唇も蜜で濡れて輝いている。それらは男を誘うような色気ではなく、どこまでも無垢な少女の印象を強く押し出していた。一部の乱れもない、美しいドレープ。多ければ多いほど位の高さを表すといってもいいそれは、女神達に負けないほどたつぷりと惜しげなく生地を使って作られている。くるりと一回転してみると、裾がふわりと舞ってその美しさがさらによくわかった。

綺麗に結び上げられた髪。生花は絶妙な配置で、うるさすぎず寂しすぎず、彼女自身が見てもうっとりしてしまうほどだった。

運ばれてきた朝食をゆっくりと食べながら、窓の外を眺める。

9

天候の荒れなどありえないこの天界は、今日も綺麗な青空が広がっている。

地面には一面に花々が咲き乱れて、やっぱりここは神の住む世界なのだと実感する。

あちらこちらに建っている白亜の宮殿と、色とりどりの花々。そして、青い空のコントラストがとても美しかった。

この景色にも、すっかり慣れてしまったと、ユカリはぼんやりと考える。ここに落ちてきた当初は、あれほど毎日泣いてばかりだったというのに。

恋しかった。

家族との何気ない会話、携帯でのメールのやりとり、友人とのウ

インドウシヨツピング。

元の世界の全てが恋しかった。帰りたくて帰りたくてたまらなかった。

どうして私が。なんでここに。望んできたわけじゃないのに！

食事を出されても、食欲がわかなかった。

違う世界だとまざまざと見せつけられる、外の景色が怖かった。

豪華なベッドが、かえって自分の部屋ではないのだと思い知らされるようで嫌だった。

分厚いカーテンを閉め切って、夜も昼もなく泣き続けたユカリに、彼の神はずっとついていてくれた。自身の仕事もあつただろうに、ずっと彼女を抱き寄せて頭をなで続けていた。

『泣かないで、愛しい子。きっといつか、あなたの世界に帰る日が来ます』

『大丈夫、必ず私が方法を見つけてみせますから』

『ユカリ。ほら、果物の汁を搾ってもらったの。泣いてばかりでは、そのうち身体を壊してしまっわ。帰る日のために、力をつけなければ』

その時のユカリには時間の感覚などなかったから、それが何日間だったのかはわからない。けれど、少なくとも彼女にとっては、長い長い時間だった。

それこそ、永遠に思えるほどに。

いつになったらこの悪夢が終わるのか、それしか考えていなかった。

そんな長い間、彼の神は文字通りつきつきりでいてくれたのだ。ひたすら彼女の体調を心配し、なぐさめ、時には手ずから食事を与えてくれた。

帰る手段がないとわかった時は、泣きわめくユカリを抱きしめて、自らもほろほろと涙をこぼした。

涙も枯れ果てて、人形のようになったユカリに、彼の神は言った。

『心配しないで、ユカリ。私の力の及ぶ限り、全力であなたを守るから』

そうして開かれたカーテン。

その向こうに広がっていた突き抜けるような空の青さと、彼の神の光のような笑顔を、彼女は一生忘れない。

たとえ二度と戻れなくとも、このお方に一生を捧げようと、そう思った。

### 3 女神達の優雅な日々

ニンフから受け取ったティーセットを、こぼさないように気をつけながら小走りで駆ける。

大理石の床は、不思議と裸足でも冷たくなくて、むしろ靴を履いていた方が滑って転びそうだ。

かちやかちやと食器が音を立てる。

はしたないとは分かっているけど、一秒でも早く敬愛する彼の神に会いたかった。

「アテナ様！ お菓子をお持ちしました！」

「ユカリ、そんなに慌てることはないのよ」

ゆつたりと微笑むのは、麗しい女神。

彼女をあのだ獄から救った、そして暗闇から解き放った、ユカリにとって最も優先すべき対象。

金色の長い髪をゆるりと流し、華奢な椅子にゆつたりと座った姿は、まるで一枚の絵のよう。そんなアテナの滑らかな手で頬をなでられて、ユカリは無意識にうつとりと目を閉じてしまう。

蜂蜜色の瞳がそんな彼女の姿を映していたが、その半分は長い睫毛で隠れてしまっていた。

そんなアテナと一緒にいるのは、やはり麗しいアフロディーテ。豊かな蜂蜜色の髪を豪華に結い上げて、生花で飾っている。

ユカリもけして容姿が劣っているわけではないのだが、彼女の隣

に立つのもおこがましいと感じてしまうほどの華やかさだ。アテナの宮殿のはずなのに、自分が主であるかのように、すっかりくつろいでいる。

アーモンド色の瞳は大きくて、長い睫はくるりと上にカールしている。

白魚のような手も小さくてすっと通った鼻筋も、男ならば絶対に守りたくなるような可憐さ。

けれど、全身から放たれるのは、アテナには絶対にならない「色気」だ。

たとえ世界中の美女を集めたとしても、その中に隠れたアフロディーテは、絶対に一瞬で見つかってしまっただろう。

そんなアフロディーテに手招きされて近寄ると、ユカリの身体はさっと攫われ、豊かな胸にぎゅうぎゅうと抱きしめられた。

別に貧相な体形というわけではないが（むしろ日本では標準以上だったと自負している）、アフロディーテの前では子供も同然だ。

「ああ、この小ささ！ すっぱり収まる大きさ！ やっぱりユカリは可愛いわねえ」

「アフロディーテ！ 何をしているのですか！」

「何よ、減るものじゃないんだし。可愛いものを愛でるのは、神として当然のことでしょう？」

「確かにユカリは可愛いです！ けれど、それとこれとは話が別です！！」

アテナの頬が、興奮で赤く染まってしまっている。そんなアテナも美しいと思うのだが、早くアフロディーテがからかっているだけ

だと気づいてほしい。

明らかにおもしろがっている口調で、アテナに聞こえないようにくすくす笑っているのだから。

ユカリへの親愛の情は本物だが、ダシにされている感が否めない。

「ア、アフロディーテ様、もうそのくらいで……。アテナ様がお気の毒です」

「ユカリはいつも一生懸命ねえ」

「だって……。アテナ様は、私の命の恩人ですもの」

桜色の唇でくすりと笑うアフロディーテに、頬が熱くなるのを感じた。

あの時のアテナの凜々しさといったら、何度思い出しても素敵なのだから。

面白がるように群がる太い腕の中を逃げまどっているユカリの悲鳴を聞きつけ、アテナが二ヶを飛ばしてきたのだ。

『乙女に何という仕打ちをしているのです！ その汚い手を放しなさい！』

二ヶが突き刺さった半径五百メートルの神々が吹っ飛んだ。

文字通り吹っ飛んだ。

そして、涙目で息も絶え絶えになっているユカリに、優しく微笑みかけたのだ。

もう大丈夫だと。

ちなみに、アテナの横にちょこんと控えている、亜麻色の髪の幼い少女。背中から真っ白な羽が生えていて、肌はすべすべふにふに文字通り天使のように可愛いこの子供が、実は武器になるなど、一体誰が想像できるだろう。

彼女は二ヶ。

アテナの腹心のような存在で、勝利の女神と呼ばれているらしい。

ユカリは（興味のない科目については）あまり真面目な生徒とは言えなかったが、美術の教科書が何かで、「勝利の女神二ヶ像」とかいふ彫刻を見た気がしないでもない。頭と両腕がなくて、船首につけられていたものだとか聞いた覚えがある。

いざという時はぴよんと飛び上がって、器用に空中で一回転するするとたちまち一本の槍（この時の姿が二ヶ。アテナ愛用の武器）に姿を変えるのだから、初めて見せてもらった時にはそりゃあ驚いた。

こんな可愛い子が、まさか半径五百メートルの神方を吹っ飛ばすほどの力を持つているなんて！

二ヶはしゃべらない。少なくとも、ユカリはしゃべっているとこるを見たことがない。

けれど、いつもにこにこしているから、少なくとも好意を抱いてくれているのだと思っている。

戦争に出ると、毎回のようアテナも二ヶも怪我をして帰ってくる。

その度にユカリが泣きながら手当てをするのだけれど、そんな時

でもアテナは彼女に優しいのだ。

『ユカリが手当てをしてくれると、なんだか治りが早い気がします』  
『そんなことはないです！　お願いですから、怪我なんてしないで帰ってきてください！』

ぐしぐしと泣く情けない頭を、ニケがそつとなでて慰めるのもいつものことだ。アテナが彼女の心の支えなら、ニケは心の癒しだった。

それについて話すと、アフロディーテはいつも爆笑するのだが。

「アフロディーテ様も、こちらの果物はいかがですか？　ニンフの皆さんに人気なんです」

「ええ、いただいわ。ニンフはこういうものには敏感よねえ」

艶やかに笑ったアフロディーテが、綺麗に切り分けられた果物を一房、優雅につまむ。満足そうにうなづくアフロディーテも、同性のユカリがうつとりしてしまうほど美しい。

「ユカリ、こちらにいらっしやい」

「はい」

涼やかなアテナの声に導かれて近寄ると、ネクタルが注がれた杯を差し出された。

ネクターは神の飲み物。人間のユカリが口にするには、畏れ多くてためらうものだ。

ユカリが慌ててかぶりを振っても、アテナもアフロディーテも笑っばかり。

「ここで生活しているんだから、食すのもおかしくないでしょ？」

「で、でも……私、人間です！ こんなものをいただくわけには…

…！…！

「いいですよ、ユカリ。誰が反論しようとも、私が許します」

アテナの優しい言葉に促され、震える唇でネクターを一口含む。

言葉に表せない程の芳潤さと芳香が口一杯に広がって、ユカリの頬が無意識にだらしなくゆるんだ。

「おいしい……」

「でしょう？ ユカリにも一度、是非楽しんでもらいたかったのよ」

うふふと柔らかく笑うアテナからは、戦争の時の勇ましい姿は想像できない。

けれど、「戦に赴きます」と仰る時の凜とした美しい佇まい！

毎回毎回うっとりしてしまうユカリだが、絶対に誰でもそうなると思っている。

「ユカリ、あなたも私達の世話ばかりで疲れたでしょう。少し休んでいらっしゃい」

「そんな！ 私、アテナ様のために働くの、幸せです！」  
「嬉しい言葉をありがとう。でもね、ユカリ。あなたは人間なので  
すよ。少しは休息をとらなければ」

そう言っつて微笑むアテナの、なんて美しいこと！

ああもう、私ここに来てよかった！ 美人さん万歳！！

こっそり悶えるユカリの横で、アフロディーテがのんびりととん  
でもないことを言い出した。

「あら、でも。私、ユカリは神にしてもいいんじゃないかと思っ  
てるわよ？ 人間にしては親しみやすいし、可愛いし、ニンフ達も仕  
える相手として認識してるみたいだし」

ニケも一生懸命にくくくとうなずいていて、ユカリは一瞬、状  
況も忘れてその愛らしさに頬をだらしなくゆるませてしまった。  
慌てて顔を引きしめて否定しようとしたところで、よりもよっ  
てアテナまで同意してしまう。

「確かに……ニンフがあのように、人間に対して献身的に仕えるの  
は珍しいですね。もしかしたら、神になるべくしてここに来たのか  
しら？ ユカリは」

うふふと笑ったアテナは、しかし次の瞬間表情を一変させた。

「ああ、でも、人間を神にするにはあの忌々しい父上の許可を得なければ……！ ユカリをこれ以上危険な目に遭わせるわけにはいきません！」

どこがどう危険なのか、ユカリにはよくわからなかった。だが、父上というからにはゼウス。そしてイコール、男の神。なるべく会いたくはない。

想像しただけで涙目になりながらアテナにすがりつくと、大丈夫というように優しく髪の毛を梳かれる。

それはまだ、彼女が平和に暮らしていた頃のいい思い出。

## 4 予兆

「ユカリ、ちょっと」

ある日、いつになく神妙な面持ちで、アテナがユカリを手招いた。小首を傾げながら傍に寄ったユカリに、アテナは美しい蜂蜜色を顰ませる。

「ヘラがあなたを呼んでいるの。良くない予感がするわ、私が断つてもいいけれど……」

聞けば、ものすごい剣幕らしい。あんなところに可愛いユカリを行かせられないと、アテナは眉根を寄せたまま続けた。

「理由を尋ねても、身に覚えがあるはずだの一点張り。念のために訊くわ。ユカリ、心当たりは？」

「あ ありません！！ 第一私、ヘラ様にお会いしたこともありません！」

そもそも、アテナにべつたりのユカリが、他の神と出会うこと自体が珍しいのだ。

神（しかも女神限定）自身がアテナの宮殿に訪れなければ、ユカリと顔を会わせることもない。

アテナもそれを知っているからこそ、「念のため」と前置きをし

たのдарろう。

不安に瞳を揺らすユカリの頬をなで、アテナは心底悔しそうに唇を噛んだ。

「非常に不本意で勝手極まりない申し出ですが、断るわけにはいきません。ヘラはあれでも父ゼウスの妻。あんなどぐされ野郎が私の生みの親だということ自体認めたくないのですが、万能の神、そして神々の長であるゼウス。その妻であるヘラには、誰も逆らうことができないのよ」

あの若作り、やら年増、やら、不穏な言葉をアテナが呟いている気がしたが、いつも優しいアテナがそんな暴言を吐くはずがない。まして、自分の父親をどぐされ野郎などと呼ぶはずがない。

ユカリは全てを気のせいだと自分に言い聞かせ、大丈夫だと両の拳を握ってみせた。

「だ、大丈夫です！ アテナ様のお母様なら、きっと何か理由があるはずですよ！」

もっとも、その拳はぶるぶると頼りなく震えていたが。

アテナの父親の妻なら、当然母親になる。

そんな単純思考で言い切ったユカリに、アテナは何ともいえない表情になった。

「……へらは私の母ではないのよ」

「え!？」

「私は自力で、父の額をかち割って出てきたの。あの男が！ 私の母上を！ 自分の正妻を！！ 丸ごと呑みこんだせいでね」

アテナの笑顔が怖い。ユカリは初めてそう思った。

美しいかんばせに、何やらどす黒いものがあふれかえっている。

それでもまあ、なんとかなるだろう。

話を通じない相手でもなし、きちんと誠意を持って臨めば問題はないはずだ。

\*\*\*\*\*

などと思っていたユカリは甘かった。

たどえて言うなら、小さい子供が綿飴の袋を親にねだって、結局食べるのに辟易するくらい甘かった。

「そなた……人間の分際で、よくもわたくしの夫につきまとえるな」

「え？ はあ？ あの、それ、何かの間違いじゃ……」

「嘘を申すな!!」

びりりと空気が震えるほどの気迫で大きな声をあげたへらは、美しい顔を怒りに染めてびしりとユカリを指さした。

「生意気で愚かな娘。身の程を知らぬ娘。その傲慢さ、今再び思い知るがよい！」

そうして、彼女は今に至るのだった。

口がきけなくなる上に、女神達と離ればなれにされるといって、絶体絶命の状態に。

## 5 接触

(ア、アテナ様あ……ニケ様あ……アフロディーテ様あ……！)

どことも分らない荒野。本当に天界なのかと疑いたくなるような、土と草の寒々しい景色。

辺りを見回しても宮殿はおろか家すらなくて、さらに不安を煽りたてられた。

遠くに見えるのは街だろうか。家らしきものがぎゅうぎゅうと集まっていて、神々のいる場所ではありえないその光景に、少なくともここが神の住まう領域ではないことがわかった。

となると、答えは一つ。

英雄と呼ばれる人々、そして天に召されることを許された人々が住む領域だ。ここから神々の領域までは、かなりの距離があるはず。

アテナと離ればなれにされてしまった。いくら心の中で必死に呼んでみても、あの凜として優しい声が応えてくれることはない。

最後に目に焼きついたのは、ヘラの燃えるような瞳。

とても綺麗な女神だったが、怒りに染まった双眸が恐ろしくて、よく見ることができなかった。

どうして自分が目をつけられたのか、ユカリにはさっぱりわからない。特にヘラの氣に障るようなことは……。

していないと思いかけて、ふと一人の男神を思い出した。

もしかして。

毎日のようにやってきてはアテナにフルボッコにされていた、あの男。

きらきら光る金髪が印象的だった、あの男。

もしや、あれがゼウス？

あんなのに追いかけて回されただけで、嫉妬の対象になったのか？

思い返せば、「いい加減にわきまえなさい、この好色親父！」「生みの親に向かってその態度はなん……ぎゃあああああ！！」とかいう会話を遠くで聞いたような気がしなくてもなかった。

あれが全能の神ゼウスかと疑いたくなるような言動だったが、「ユカリは何も気にしなくていいのよ」と甘やかすアテナに従っていたのが運の尽きだったのかもしれない。

ヘラ様の怒り、半端ない。

というか、呪いの程度半端ない。

女神の嫉妬恐ろしい。

そして、とぼっちり食らった私ドンマイ。

この状態では、男神が近くにいっても悲鳴をあげることすらできない。

ひたすら走って逃げても、遊んでいるだけだと思われるだろう。

最悪だとげんなりとしつつ、それでもどこかにいるであろうアテナ達を探して、ユカリはとぼとぼと歩きだした。

「ごつごつとした岩場が、裸の足の裏に痛い。

アテナと暮らしていたあの場所が、まるで夢のようだ。

(だーれーかー！ 女の人限定でー!!！)

心の中で叫んでいると、目もくらむような美女が向こうからやってきた。

やった！ と喜んだのもつかの間、ユカリは微妙な違和感に眉根を寄せる。

(……うん?)

女性にしては、妙に肩幅が広いような気がする。それに、歩き方もどことなく粗雑なような……。

いや、でも、あんな綺麗な男の人はいない！ はず！

そんな思いを胸に、必死に足を進める。

精神的にも肉体的にも、かなり限界がきていた。

精神的な支えを求めて、最後の力を振り絞る。

倒れそうになりそうな身体で、いや実際ほとんど倒れこむように、はっしと腕にすがりつく。そして、支えてくれた腕の力に、ぞわりと総毛立った。

……この力強さ、この筋肉質。

どう考えても、女性じゃない。しかも気配からして、神じゃない。

ということは。

ぞぞぞぞぞぞと音を立てながら、全身から血の気が引いた。

力の限りに殴りかかったのに、自慢の拳は男にかすりもしなかった。

それどころか、「うおっ」なんてどこか間の抜けた声と共に、軽々と避けられてしまう。

悔しさにぎりぎり歯ぎしりをするユカリに、男が声をあげて笑った。

(何よ何よ何よ、何がおかしいのよ!!)

目に力をこめて睨みつけると、男の笑い声がさらに大きくなる。

「お前、変な奴だな！ さっきまで泣きそうだったのに、もう殴る元気があるのかよ」

ひいひいと笑いながらそう言った男は、笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を拭いながらユカリを見る。

「しっかし、何だってまたこんなところにいるんだ？ こころ辺には誰も住んでないはずだが……」

(……ここら辺って、ここはどこよ?)

「迷子にしちゃあ、大きすぎるしな。身なりも見てくれもいいし、  
どこかから攫われたか? お前、どこから来たんだ? 送ってって  
やるよ」

ほれ、言ってみろ。

殴りかかった事など気にもとめず、男は「ん?」と小首を傾げる。  
あまりにあっけらかんとしたその態度に、ユカリは思わず毒気を  
抜かれてしまった。

何なんだこいつは。

馬鹿か、馬鹿なのか。

こちらが殴りかかった(しかも力の限りに)というのに、気にも  
とめていない。しかも親切にしてくるとは。

下心があるようには見えなかったが、思わず探りを入れるような  
目つきになってしまう。心の中で散々こけにしたところで、はたと  
気づいた。

この男、神だったらどうしよう。

血の気が一気に引いていく。

ざざっと音までしそうだ。

人間だとばかり思っていたけれど、ここがどこかわからない限り、  
神だという可能性も否定できないのだ。大切に囲われていたのが裏  
目に出て、服装だけでは判断できないのが悲しい。

慌てて非礼を詫びようとして、声が出ないことをようやく思い出

した。

「これでは、何を言おうとしても伝わらない。仕方がないので、棒きれを拾って、地面にへたくそな文字を書いた。」

『ごめんなさい』

アテナに教わった、ギリシヤ語。

派生がありすぎて覚えるのに苦労したのだが、アテナの優しく丁寧な指導の賜で、外国語が苦手な日本人であるユカリも、なんとか簡単な単語ならば書けるようになっていた。

「ん？ ……お前、もしかして」

『声 である ない』

「……声が出ないのか。名前は書けるか？ どこから来たんだ？」

『ユカリ。きた 場所 わかる ない』

男の声がぐつと優しくなった。

そうか、と呟いたその男に頭をなでられそうになったので、ユカリはばしりと振り払って威嚇しておく。

一瞬間の抜けた顔になった男は、次いで吹き出した。

「お前、男が嫌いか。そうかそうか」

『はい』

「ユカリ、か。誰と一緒にいた？」

『アテナ様』

「あー……」

簡潔な答えに、男が何とも言えない表情になる。

上を見て、下を見て、右を見て、左を見て。

「あの、な。悪いことは言わねえから、アテナのところに戻るの  
諦めろって」

何故だと思わず睨むと、男は乱暴に頭をかきながら、非常に言い  
にくそうにこちらを見た。

ユカリは何も悪いことをしていないと明言できる。  
むしろ、とぼっちり受けた方だ。何が悲しくて、夫婦喧嘩のいざ  
こざに、何の関係もない自分が巻きこまれないといけないのか。

「アテナと一緒にいたって事は、あれだろ。噂のヘラに呪いかけら  
れた奴だろ。俺達英雄にまでお達しが来てんだって、アテナのこ  
ろには案内するなっさ」

英雄？ それならば、ユカリが遠慮する必要など、始めから

なかったのだ。

いやいやそれよりも、アテナのところに帰れない？

どうしてそこまでする必要があるのでろうか。

恐るべし、ヘラの執念。

神の嫉妬怖い。

関わりたくなかった。

というか、思いつきり濡れ衣なんですけど！

『帰りたいたい』

『だーかーらー、それはできないんだって』

『帰りたいたい』

『無理だつて。逆らったら俺が何されるかわかんねえもん』

『帰りたいたい』

『ああもう、お前もいい加減しつこ』

苛ついたように彼女を見た男は、ぎよっとしたようだった。それにも構わずに、無言でぼろぼろ泣きながら、同じ文字を書き続ける。

アテナ様、アテナ様、助けてください。私はここです。お願いです、見つけてください。

ここはどこですか、どこまで行けばお会いできますか、どうしたら見つけていただけますか。私はどうしたらいいのでしょうか。

「……………っ！！」

アテナは全力でユカリを守ると約束してくれた。  
念じれば必ず叶うと信じて、同じ文字をひたすらなぞり続ける。  
何度も、何度も。

その様子を見た男は、諦めたように大きく息を吐いた。

「……ああ、くそ！」

ぐしゃぐしゃと頭をかき乱して、忌々しげに舌打ちをし、そうして彼女に手を差し出す。

もちろん、即行はたき落とさせていただいた。

「俺はアキレウス。アキレウスだ。お前が落ち着けるところを見つ  
けるまで、面倒見てやる。いいな？」

『男 嫌』

「あー、はいはい。わかったわかった。我慢しろ」

ぐしゃりと頭をなでられたユカリが、その手を力の限り叩き落と  
したのは言うまでもない。

## 6 美女なのに美女じゃなくて変人だった

アキレウスは本当に変人だった。

「俺のことは女だと思えばいい」などと言ったあげく、それでもやはり男は男だとつたないギリシャ語で主張するユカリに、「いいから思えやコラ」とすごんできた。

負けるものかと精一杯虚勢を張ったユカリだったが、やはり怖いものは怖い。

(額に血管浮いてた。本当にこめかみに血管が浮き出てる人、初めて見た。本気で怖い)

小動物のようにびくびくしながらそんなことを思い返すユカリは、しかし譲れない一線があった。

女と思えと言うならば、後生だから女装してくれ。

そう頼むと、本っ当に嫌そうにしながら、渋々女装をしてくれた。

突然の頼みなのに、何故女物の服を持っていたのだろうか。

しかもやけに似合うあたりが微妙に怖い。

元々女性と間違えたぐらいだから美人だとは思っていが、女装をすると本物の女性にしか見えない。

……これで英雄か……。

ユカリがしみじみしてしまったのも無理はないだろう。

筋肉はしつかりついているのだろうが、優男に見えて英雄とは、やはり神話の世界はよくわからないものだ。

ただ、いくら邪険にしても怒らないし、カ一杯殴りかかっても何も言わない。

さらには、何だかんだ言ってユカリの面倒を見てくれるから、俗に言う「いい人」なのだろう。

アキレウスは何を言うでもなく、黙々と歩き続ける。土ばかりが目立ち、小石が足の裏に当たって痛かった地面から、いつの間にか草が多く茂った地面へと変わっている。

それにしても、一体いつまで歩けばいいのだろうか。

しゃべることができないユカリは、くいとアキレウスの腕を引いて、注意をこちらに向けた。

「ん？ どうした？」

振り向いたアキレウスに、ジェスチャーで書くものをくれと訴える。

『今 どこ 向かう？』

「ああ、とりあえず、俺の家だ。拠点がなきゃ、どうにもなんねえからな」

もらった羊皮紙に懸命に書きこむと、アキレウスは嫌な顔一つせ

ずに教えてくれた。その親切さに、ユカリは彼を信用してもいい気がしてきた。

これは断じて刷り込みなどではない。絶対ない。  
助けてくれたからって、そこまで単純な人間ではない。

呪文のように胸の中で唱えつつ、ひよいひよいと進んでいくアキレウスの足の速さに何度も殴りかかりながら、ユカリが連れてこられたのは簡素な一軒家。

あたりには一軒も家がなく、ただ森を挟んだ遠くに街が見えるだけだった。

「入れよ。お前の住む部屋ぐらいはあるから」  
『ありがとう』

おそるおそる書いた羊皮紙を見せるユカリに、アキレウスはにいと笑ってうなずいた。ちなみに、頭をなでようとしたらしい手は、途中でぴたりと止まって下に下ろされている。

「お前、やっぱりアテナ達の教育がよかったんだな。挨拶はきちんと書けるのか」

『挨拶 大事 アテナ様 言っ』  
「だよなあ。うん、お前気に入った。好きなだけここにいろよ」

アテナのところ以案内はしない。けれど、代わりにここに住んでいいと言ってくれる。

この人にすがるしかないからと不承不承ついてきたユカリだが、アキレウスだけは男でも気を許してもいいような気がしてきた。

……女性の格好をしているからというのもあるとは思っただが。

張り詰めていた気を少しだけゆるめて、ユカリはこくりとうなずいた。アキレウスが押さえている扉から中に入る。

もっと乱雑としているかと想像していた室内は以外にも綺麗に片づいていて、ますます男の家だという印象が薄れていく。

むしろ小綺麗なあたり、一人暮らしの几帳面なOLのようだ。

都内に住む姉の部屋を思い出して、思わずしんみりしてしまう。今頃姉はどうしているのだろうか。

そんな考えがユカリの脳裏をよぎり、意識は完全に元いた世界にシフトする。

夏は暑くて、あれほど嫌いだったコンクリートジャングル。

けれどユカリは、休日にヒールのある靴を履いて、その上を闊歩するのが好きだった。

かつん、かつんと音を鳴らして歩くと、少し大人になった気分になれたのだ。

ませてるんだから、と姉に笑われたが、高校生のユカリにとって「大人の女」は憧れだった。姉には絶対に言わなかったが、しっかりと自立して働いている彼女を、ユカリは尊敬していた。

いつかきつと、自分も姉のように自立するのだ。そう決めていたはずなのに、今の状況はどうだろうか。

誰かに頼らなければ何もできない自分を、ユカリはこっそりと自

嘲した。

「どうした？」

ぼんやりしていたように写ったのだろうか、アキレウスがユカリの顔を覗きこんでくる。

それに曖昧に笑い返して、何でもないとかぶりを振ったユカリに、アキレウスは小さく肩をすくめた。

深くは追求しない、そういう意味だろう。

「こつちだ」

お前の服も用意しねえとなあなどと呟いているアキレウスの後ろをついて歩きながら、ユカリはこつそり真つ白な大理石にそつと手を滑らせる。

……アテナの宮殿と、同じ素材。

あそこよりもずつと質素だけれど、同じような柱。

思い出すだけで涙がこみ上げてくるが、男の前で涙を見せるなど、ユカリにとっては言語道断だ。もう一度アテナに会えるまで、そして元の世界に戻るまで、絶対に泣くまいと決心する。

ぐいと袖でにじんだ涙をぬぐったところで、アキレウスの足が止まった。

どうやら、彼女のものになる部屋についたらしい。

素朴な木製の扉。

取っ手は銅でできているのか、僅かに緑青が見える。

アテナの宮殿では金属の類は全て白金だったため、ユカリの目には新鮮に写った。

「ここ、自由に使っていいぞ。たまに変な奴来るけど、まあ気にすんな」

『はい。ありがとう 優しい アキレウス』

書きにくい手元で懸命に書いて見せると、アキレウスが小さく苦笑する。

「それにしても、お前の文法滅茶苦茶だな。アテナも短期間では教えきれなかったか」

『アテナ様 違い 私 悪い』

「ああほれ、その動詞の使い方。活用間違ってるっつーの。……  
教えてやるからこっち来い」

アキレウスは呆れたようにため息をつくど、椅子を引いて顎でそこを示した。

座れという意味だろうと察し、ユカリもおとなしく指示に従う。

それが地獄のような特訓の始まりだとも知らずに。

「違う馬鹿！ 何度言ったらわかるんだ！ そこは三人称だから語尾はこうだろうが！！」

(ひいひいひいひい！！)

『ごめなさい』

「阿呆！ また綴りが違うわ！！」

『ごめ ごめんんあさい？』

「違うわ阿呆！！ その脳味噌は綿菓子か！？ だから覚えられないのか！？」

(アキ、アキレウス、人格違う……！！)

そんなやりとりが続くこと数週間、ようやくアキレウスの愛の鞭(という名の暴言)も少なくなってきた。

ユカリの右手にはペンだこがくつきりとでき、無駄にした羊皮紙は数知れず。

お世辞にもよくできた生徒とは言えなかったが、アキレウスは見放すことなくユカリに文字を教え続けていた。

ユカリ自身がトラウマになるほどに恐ろしかったというのは別の話として。

「おし。まあ、こんなもんだろ。わかんねえことがあつたらまた言えよ」

『はい。ありがとう、アキレウス』

さすがに今回は書けたらしく、アキレウスが満足そうにうなずいた。

本気で怖い先生だが、ユカリがきちんと書けた時には褒めてくれる。

しかも、いまだに彼女の要求通り、律儀に女装をしているものだから、女の人と暮らしているような錯覚に陥ることもしばしば。

男だけれど、アキレウスは嫌いではない。

アキレウスの家で厄介になり始めてから数ヶ月、ユカリはようやくそつ思えるようになった。

## 7 英雄は女装がお嫌い

ふと思った。

アキレウスはどうして女装が似合うのだろうか。というか、そんなに板についているのだろうか。

化粧も本物の女性と同じくらい、下手をすれば女性よりもうまいかもしれない。

何の疑問も持たないまま何ヶ月か過ごしてしまったユカリだったが、そんな疑問がわいて、何となくアキレウスに訊いてみた。本当に何となく。

その問いに、アキレウスの表情が一変した。

これ以上ないほど凶悪な顔だ。

訳もなく平謝りしたくなるほど怖い。

気の強いユカリが、本気で泣くかと思ったほど凶悪だった。

「そうかそうか、俺の女装はそんなに自然か……」

ふふふふふふふふ。

地底からわき出るような低い声で笑うアキレウス。目が据わっている分、逆に怖い。

もういい、何も言わないでとユカリが書く前に、彼は語り始めてしまった。

「元々俺はな、母親が『息子は戦争に出ると死ぬ』なんつー予言を

聞いたせいで、女しか住まない島に保護もとい幽閉されてたんだよ。男子禁制。もちろん俺も女の姿。小さい頃はまだよかったよ。ああ、よかったさ。けどなあ！ 思春期の俺にとつて、どんだけ苦行つませりゃ気が済むんだコノヤロウ！ てな感じだったな、あれは」

ふふふふふふふふ。

また不気味な笑い声（もう笑い声ですらない。乾ききっている）を発して、アキレウスが手に力を入れた。

ちようど？こうと手に持っていたリンゴが握りつぶされる。

「島から脱出する手段なんてありやしない。泳いで逃げるには、周りに島がない。そんな孤島に！ 女に囲まれて！ 女の振りをする俺って一体何なんだ！？ とか腐ってたら、とある国の王にだまからかされて、戦場へ引つ張り出されたわけ。まあ、島から出られたのは嬉しかったけどなあ。あいつ、やることなすこと破茶滅茶だったからなあ……。戦争もめんどくさかったし」

アキレウスが遠い目になる。よほどその王に振り回されたのだから。  
う。

だから面倒見がいいのかと納得してしまうユカリだった。  
彼からはどう見ても、苦勞人氣質が溢れ出ている。

……アキレウス？ 英雄アキレウス？

どこかで似たような名前を聞いたことがあるような。

小首を傾げたユカリが、唐突にひらめいた。

（あああああ、アキレス！！ アキレス腱で有名なアキレス！）

え、アキレスって女装してたの？

しかも、英雄とか言われてる割に、戦争嫌だったの？

幼い頃に神話で読んで想像していたアキレス像と、今日の前にいるアキレスにギャップがありすぎて、ユカリの頭の中でどうしても結びつかない。

どうしようと悩んだ結果、アキレスが怖すぎるのと、ギャップのせいで同一人物と見なすのは無理だと判断して、アキレスについてはそれ以上考えないことにした。

後から思い返しても、ユカリのこの判断は賢明だったと胸を張って言えるだろう。

この先々でアキレスに女装について言及した男は、例外なくフルボッコだったのだから。

## 8 こちらからお断りいたします

断りなく家を出るな、とアキレウスはユカリに言った。

本当なら彼女を匿うのも危険なのだ。

ヘラに知られたら、どんな罰を受けるかわからないのだ。

どんだけ恐れられているんだ、ヘラ。

ゼウスよりも最強なんじゃないかと思えてくる。

というか、万能の神なら、奥さんの手綱もしっかり握っておいてくれ、ゼウス。

不用意に男に会わなくて済むから、ユカリにとっては嬉しいことでもある。だが、外での用事の一切を引き受けてくれるアキレウスには申し訳なくなってしまう。

一度そのことで謝ったら、「俺はそこまで鬼畜に見えるかこの馬鹿が」などということ言われたので、それきり言わないようにはしている。

だがしかし、やっぱり申し訳ない。せめて家の中のことはしっかりとやらねば！ と、両手を握りしめるユカリであった。

女装をする男と、言葉を話さない東洋人の女。

そんな奇妙な共同生活にも、互いにだんだん慣れてきたある日のこと、突然珍客が訪れた。

というよりも、アキレウスが連れてきた。

男嫌いのユカリのためにと、極力男を家に上げないようにしていた彼にしては、珍しいことだ。

反射的に隠れようとするユカリを手で制し、気まずそうに頬をかいている。

「待てつて、ユカリ。こいつは悪い奴じゃない……多分。きっと。おそろく」

「おいアキレウス、何だその紹介は。私の品性が疑われるではないか」

「てめえの行動を胸に手を当てる考えてみる」

言葉だけ聞けば非常に険悪な状態だが、どちらも気にはしていないようだ。彼らの仲の良さがうかがえた。

おそろくは、ユカリと彼女の親友のように。

じゃれ合う（少なくともユカリにはそう見えた）彼らを見ていると、些細なことで冗談を言い合っては笑う、ユカリ達自身を彷彿とさせた。

彼女とも、こんな風に悪態をつき合っては笑い合っていた。

どんな事でも、それこそ家族にも秘密の相談でも打ち明けられた、一生涯の親友。

互いに支えられ合って毎日を過ごしていた。

彼女は今、心配してくれているだろうか。

意外に気の弱いところがあつたから、泣いてはいないだろうか。弱さも強さも、補い合つていた二人だったから。

生まれる場所を間違えた双子だね、と笑い合つた彼女の笑顔を、ユカリははつきりと覚えている。

ぼんやりと思考の海に沈んでいるユカリを不審に思つたのか、アキレウスが彼女の顔を覗きこむ。

「ユカリ？ どうした」

その声に我に返つたユカリは、予想以上に近くにあつたアキレウスの顔にほんの少しだけ後ずさつた。敏いアキレウスはその僅かな動作にも気づいたようで、苦笑して身を引く。

その行動にほうと息を吐いたユカリは、改めて何でもないとかぶりを振つた。

『少し考え事をしていました。すみません、お客様の前で』

走り書きの羊皮紙を渡すと、アキレウスはそれ以上客人がユカリに近づかないように腕で牽制しながら、その客人をくいと顎で示した。

「こいつはアポロンだ。まあ、アテナの所にいたお前なら、聞いたことぐらいはあるかもしれねえが……」

アポロン。

と聞いてまず思い出すのは、アルテミスの苦々しい顔だ。

「あの愚弟め」と言っていたような気がする。その横でアテナが、「あの好色最低男のせいで、またニンフが犠牲に」と憤慨していたような気がする。

その時給仕をした茶葉の種類まで思い出しつつ、ユカリが微妙な距離を作ったのは、まあ仕方がないことだろう。

「おい、何だその距離のとり方は」

「正しい判断だ、ユカリ」

心外そうに顔をしかめるアポロンと、したり顔でうなづくアキレウス。

どちらがユカリにとって信ずるに値するかと問われれば、間違いなくアキレウスを選ぶ。

ユカリの中でのアポロンの地位は、地を這うほどに低かった。

「何だ、この小娘は。この私が直々に、予言をしてやるかと来てやったというのに」

偉そうにふんぞり返り、目を細めてユカリを睨むアポロン。その姿に、ユカリは小さく首を傾げた。

彼女の知識の中では、アポロンはアルテミスの対となる存在。太

陽の守護神ということしか項目にない。

それがどうして予言につながるのかと眉根を寄せたユカリの疑問を、アキレウスが正確に読み取ったようだ。

「ユカリ、こいつは一応、予言の神だ。性格的にはちょっとアレだが、予言に関しては信頼できるぞ」

「一言多いわこの阿呆が。まあいい。その娘、アキレウスに免じて、特別に、予言を行ってやる」

やけに「特別に」を強調していたが、アポロンは不敵な笑みを浮かべると、おもむろに目を伏せた。気分でも悪くなったかと心配したユカリが一步踏み出したところで、アキレウスに手振りで見つとじていると制される。どうやら、彼は「予言」の最中らしい。

やがて瞼を上げたアポロンは、何度かユカリを見ては眉根を寄せた。

「『最終的には己の望む道を歩む』……か。途中経過がさっぱり見えんのは何故だ、アキレウス」  
「知るか。俺に訊くな」

どうやら、中途半端な予言の結果が、アポロンの予言神としてのプライドを刺激したらしい。

幾度も予言を行っては同じ結果に眉根を寄せ、最終的には諦めたようにため息をついた。

「……ユカリ、だったか？　おい、ちんくしゃ。この予言がはつきりするまで、不本意ながら私はお前の力になるう。これほどすつきりしない予言は、生まれてこの方初めてだ」

「おいアポロン、ユカリは男嫌い」

「何度も言わずとも分かっているわ、たわけが。それに、私にも好みというものがあるからな」

お前など眼中にないと言外に言われ、ユカリのこめかみが小さく引きつる。

だが、言い返すにも声が出ない上、そもそも口もききたくなくなっていた。

彼女がとつた方法は、ただ一つ。

『奇遇ですね。私にも好みがございます』

丁寧に羊皮紙に書いた文字を、ひらりとアポロンに見せつけただけだった。

## 9 手負いの子猫

アポロンを紹介した当初、ユカリは酷く警戒していた。というよりも、怯えていたという方が正しいのだろうか。

普段自分と生活している時とは全く違う硬質な雰囲気、アキレウスは正直戸惑った。

男が嫌いだと言いながら、出会った当初からユカリはアキレウスを、本当の意味で拒絶したことはなかった。だから、それほど重傷だろうとは思わなかったのだ。

アポロンの好みは（不本意ながらも）熟知していたし、それがユカリに当てはまらないことも知っていた。

あれほどアテナを乞い焦がれているユカリと共に生活をして、元々人の良いアキレウスが、情が移らないはずがない。

直接案内をしてやることは叶わなくとも、せめて手助けをしてやりたいと思ったのは、彼にしてみれば当然の流れだった。

けれど、アポロンを家に上げた瞬間のユカリの表情。

見かけによらず聡い彼女は一瞬でそれを覆い隠したが、アキレウスは読み取ってしまった。

裏切られた。

翳った瞳の刹那の絶望が、その一言を雄弁に語っていたのだ。そこでようやく、アキレウスは己の認識が甘かったことに気づいた。

何故男が嫌いなのか、ユカリに尋ねたことはない。  
その必要を感じなかったし、無闇に詮索することは好きではなかった。

そのささやかな気遣いが、裏目に出てしまったか。

内心顔をしかめたアキレウスだったが、ユカリがすぐに何もなかったような表情に戻ったので、自分もあえて普通に振る舞った。

予想通りにユカリはアポロンの守備範囲外だったし、ユカリも何食わぬ顔でアポロンに対応していた。

ユカリの態度はアポロンが尋ねてくる回数に応じて軟化していった。十歩以上近寄ろうとはしないが、彼が顔を出せば用意していた『いらっしやいませ』の羊皮紙を見せる程度にはなっている。

それきり姿は現さないものの、木製のテーブルにはいつも飲み物と菓子類が整えられ、彼女なりに必死に歩み寄ろうとしているのがわかった。

それは彼女が男性恐怖症を克服しようとしているのか、それともアキレウスの親しい相手だからかはわからない。

けれど、ユカリのその行動を、アキレウスはとても好ましく思っていた。

アポロンもまた、そんなユカリにだんだんと興味を持ったのか、行儀悪く菓子をつまみながら「あの平凡顔はどうしている？」などと訊いてくるようになった。

素直でないその態度に苦笑しながら、「手を出すなよ」と冗談交じりに釘を刺すのが、アキレウスの習慣と化している。

アキレウスは親愛の情と信じて、ユカリを守り続けている。

「裏切られた」と感じるほど、彼女が自分を信頼していることに気づかずに。

そして、彼女が自分だけに見せる笑顔に、少しだけ優越感を感じていることにも気づかずに。

## 10 子猫、避難する

このところ、アキレウスの家にアポロンが頻繁にやってくる。アキレウスの客人だからと精一杯のもてなしをしているものの、ユカリは内心疲れきっていた。

出会い方も第一印象も最悪。

そんな相手がすぐ身近にいることもストレスになっているし、何よりも彼と話している時のアキレウスの雰囲気嫌でたまらなかった。

ユカリと二人だけの時は、常に中性的なアキレウス。

その彼が、アポロンと話している時は、完全に「男」に見えるのだ。

初めてそれに気づいた時、今までアキレウスがどれだけ気配りをしてきていたのかを思い知った。それは無意識の行動だったのかもしれないが、今までのアキレウスを普段の状態だと信じていたユカリには、大きな衝撃だった。

だからユカリは、アポロンがいる間、なるべく自室に閉じこもっている。

結局自分は、自分に甘いのだとユカリは一人自嘲した。

簡素とはいえ、必要最低限のものは揃えられた木製の家具。

それなりに寝心地の良いベッド。

ここに来た当初は錆びついて動かなかった窓の留め具も、今では綺麗に磨き上げられている。

守られているのだ。

ユカリは彼に、何も返せないというのに。  
アテナの元に帰りたいと子供のように駄々をこねながら、逃げてばかりだというのに。

ユカリは自分がどういう人間なのかをよく知っている。  
だから、自分が嫌いだった。

卑怯者。

臆病者。

優柔不断。

事なかれ主義。

自分勝手。

数えればいくらかでも言うことができる。  
アテナと出会い、尽くすようになってからは、それらが消えてなくなったような錯覚に陥っていた。

あの場所は、あまりにも綺麗すぎたから。

優しく真綿でくるみこんで、大切に大切に扱われたから。

自分が優しい人間になれたのだと、そう思い込んでいた。それはアキレウスと生活をするようになって、違和感なく続いていた。

けれど、アポロンという存在によって、ユカリの温かい幻想は粉々になった。

だからユカリは、アポロンを嫌う。

自分自身を嫌うのと同じように、アポロンを嫌う。

しなやかな筋肉、傲慢であっても許されるほどの優雅な振る舞い、低く甘く響く声。

「男」をはつきりと体現しているアポロンの男性性の上書きをして、彼を嫌う。

そうしなければならぬほど、ユカリは小さくて卑怯な人間だった。

(……………だいきらい……………)

自分に向けて、アポロンに向けて。

両腕できつく膝を抱きかかえながら、薄暗い部屋の中でユカリはそっと独りごちた。

## 11 不可思議な邂逅

暗い冥い、闇。

自分が本当に存在しているのか、それすらもわからなくなる錯覚に陥る。

一寸先も見えないほどの闇の中、どうしてこうなったんだろうとユカリは一人首をひねった。

彼女は確かに、与えられた自室のベッドで、眠ったはずだ。

しかし、夢にしては、感覚の全てが奇妙に現実味を持ちすぎている。

ここは一体どこなのだろうか。

『娘よ。名もなき娘』

思い当たる場所もなくユカリが困っていると、突然空間を震わせる低い声がした。

轟くようなそれに驚いて、思わず数歩後ずさってしまつ。本当に後ずされたかどうかも怪しかったのだが。

「だ……誰？」

『哀れな娘。我が娘』

「いや、こんな不可思議な父親を持った覚えはないんだけど」

会話にもならない言葉のやりとりのあと、ようやく自分がしゃべれていることに気づく。

何故かと首を傾げる暇もなく、またあの低い声が響いた。

『哀れな娘よ。お前はもう、二度と元の世界には戻れまい。その魂がある限り』

「は？　ちょっと待ってよ、それってどういう意味？」  
『名もなき我が娘よ。なんと哀れなことが』

低い声は楽しんでいるようだ。くつくつと笑い声が聞こえ、声はどこまでも嫌味たらしい。

それに苛立ちが募るのを感じながら、見えない床を気持ちだけ足で蹴りつけた。

かつん、と硬質な音がして、思いがけず響いたその大きさに、ユカリはびくりと身体を震わせる。

そんな臆病な自分を隠すように、彼女は一段と大きく声を張り上げる。

「どうでもいいから、早く帰して。どうせあなたがここに連れてきたんでしょ？　声も出るようになったし、アテナ様のところに戻らなきゃ」

『声？　ああ、お前は我が娘に声を奪われていたな。案ずるな、出るようになったのは一時のぎだ。地上に戻れば、再び元通りに出なくなるだろうって』

「な」

何を、言っているのか。

現にこうして声が出ているというのに、「ここ」を出ればまたしやべれなくなる？

冗談じゃない。

ユカリは、自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。

「あなたは誰！？ どうして私をここに連れてきたの!？」

『お前の絶望に沈む顔を見たかったからだ、我が愛娘』

「私はあなたの娘なんかじゃない!！」

噛みつくように反論すると、また低い笑い声が聞こえた。

聞けば聞くほど苛つくその声に怒鳴ろうとしたその時、ようやく  
笑いをおさめた声が、不気味に響く。

『我が名はクロノス。どうあがこうと、お前は運命さだめからは逃れられぬ』

闇は、その言葉と同時に終わった。

\*\*\*\*\*

「ユカリ……おい、ユカリ！」

(……アキレウス?)

聞き慣れた声に重い瞼を押し上げると、心配そうなアキレウスの顔が飛びこんできた。

瞬間的に身を強ばらせたユカリを見て、アキレウスが苦笑しながら一歩離れる。

それに安心しながら、心のどこかが苦しくなった自分に、ユカリは気づかれないように眉根を寄せた。

辺りを見回せば、既視感のある荒野。

ユカリは一瞬、時間が巻き戻ったのかと驚いた。即座にそんな馬鹿げた考えは切り捨てたが。

「  
」

ありがとう、と言ったはずだった。

しかし、出てきたのはひゅうひゅうという風が抜ける音だけ。

あの場所じゃべれたということとは、もしかしたら治ったのかも

しない。

そんな微かな希望にすがって声を出したつもりでも、やはりクロノスの言う通り、ユカリの声はひとかけらも出てくれなかった。

『ありがとう、アキレウス』

仕方がないので木の枝を取り上げて枯れ果てた地面に書くと、いってことよと頭を叩く　振りをされた。

ユカリはこういう風に、自分からは絶対に触れない、彼のその優しさが好きだった。

彼女から彼に触れたことも、またないのだけれど。

「帰るぞ。……　　たく、何だってこんな辺鄙なところまで来たんだ

」よ

『ここはどここ？』

「お前が倒れてた場所に近い。よくここまで来れたな」

最初に倒れていた場所。アキレウスとユカリが、出会った場所。ここから彼の家までは、かなりの距離があったはずだ。

『クロノスって人に会った。知ってる？』

クロノス、の綴りが怪しかったが、どうやらアキレウスには充分伝わったようだった

。その表情がさつと固くなる。

「……クロノスだと？」

『知ってるのね？』

「知ってるも何も……お前、タルタロスに行ったのか？」

『タルタロス？』

お互い訊き返すような状態になってしまったけれど、ユカリも、そしておそらくアキレウスも、状況がいまいちよくわかっていない。二人揃ってしばらく見つめあった後、らちがあかないと思ったのか、アキレウスが小さく息を吐いて説明を始めた。

「タルタロスは、地底の奥深くにある場所だ。ゼウスが自分の父神を幽閉している」

『幽閉……じゃあ、私が出たのって』

「そう。タルタロスの罪神、ゼウスの父。クロノスだ」

## 12 神というものは

彼が言っているその意味を理解した瞬間、一瞬目の前が真っ暗になった。

神に向かって無礼をはたらく意味を、ユカリの脳が理解することを拒絶したのだ。

おおらかな神は許してくれるが、神は大抵人間を見下しているもの。

アテナやアルテミス、アフロディーテ達が、談笑しながら『己を馬鹿にした無礼な娘』への仕打ちを披露しあっている横にいたユカリは、その恐ろしさを身にしみてわかつていた。

ユカリに対してあれほど優しくかったアテナ達でさえそうなのだ、縁もゆかりもない神の怒りはどれほどだろうか。想像しただけで、ユカリは恐怖に身震いしてしまった。

実際には、ユカリの考え方は間違っている。

アテナ達が優しくかったのは彼女が「保護する対象」であったからであって、もしもユカリと何も関係がなかったら、無礼を働いた時の女神達の対応は百八十度違っていただろう。

それを知らないユカリは盲目的にアテナを信頼しているのだが……今の彼女にとっては、それが幸いした。  
アテナさえ信じることができなくなったら、きっとユカリは壊れてしまうから。

内心でアテナに助けを求めつつ、ユカリは姿が見えなかった「クロノス」の言葉を思い出していた。

そして、不意に最後の一言が脳裏に響く。

『運命からは逃れられない』

一体どういう意味なのだろうか。

それに、何故あの場所では声が出せた？

夢だと片づけてしまえば簡単なこと。けれど、ユカリはクロノスという神を知らない。そうそう都合よく、符号が一致するなどということがあるのだろうか。

『あの方……私のこと、娘って……』

震える手でそう綴れば、アキレウスの片眉が跳ね上がる。そのまましばらく何事かを考えていたアキレウスは、不意に厳しい表情で彼女の手をつかんだ。

ぞわりと背中が泡だったユカリが反射的に振り払うと、アキレウスは我に返ったように謝罪を口にする。

「悪い。だけどユカリ、こりゃ大事かもしんねえぞ」

（え？）

目を見開くユカリに、しかしアキレウスの表情は固いまま。

「誰にも知られずに人一人を引つ張るなんてこと、そうそうできることじゃねえ。あのアポロンだって、あれでも高位神の一人だ。何

「かありや、すぐに気づける」

そのアポロンも気づけなかったということとは。

「お前が一人であそこまで移動できたとは、到底思えない。つ  
てことは、だ。本当にクロノスにさらわれた可能性が高い」

ぞくり、と背筋が凍った。

「タルタロスはオリュンポスの神々の力が及ばない。例外はゼウス  
だけだ。ユカリ お前、あそこで他に何を言われた？」

「何も。ただ、私が あの方の娘だ、って」

「娘？ お前が、クロノスの？」

ユカリが繰り返し綴った言葉に、アキレウスがまた片眉を上げる。  
どういう意味だと、その瞳が雄弁に語っていた。

ユカリ自身も納得できていない。

ただの人間のはずなのに、何をもって娘などと言われなければな  
らないのだろうか。

おそるおそる彼の顔色をつかっても、ユカリには何も読みとる  
ことができない。

そのまま何事かを考えていたアキレウスは、ややしてよし、とう  
なずいた。

「知り合いに物知りのケンタウロスがいるから、そいつに訊いてみる。何か手がかりがあるかもしれん」

「ケンタロス？」

「阿呆、ケンタウロスだ。綴りはこう！ 上半身が人間、下半身が馬の種族だ。大勢の英雄が奴の教えを受けてる」

……………人面馬……………。

「いやいや、上半身だけが人間だから……………この場合は何て言えばいいんだろっ？」

「なんかもっ、ギリシャ神話って何でもありだな。」

「それ以前に、腕二本に足が四本あるんだろっか。だとしたら、哺乳類というよりも昆虫に近い？」

「……………考えていたら気持ち悪くなったから、これ以上はもうやめよう。」

首を傾げたユカリだったが、文字の間違いから発展したアキレウスの指導をびしびし受けながら、ケンタウロスについてそれ以上考えることはやめることにした。

物知りで何かを教えてくれるなら、もうそれでいい。

そんな風に考えて期待していたユカリだったが、後日アキレウスからもたらされたのは、がっかりするような内容だった。

「あいつも知らないってよ。クロノスの娘は、今いる三柱だけのは

ずだと」

『そっ』

「となると クロノスの言う『娘』は、つじつまが合わなくなるな」

『うん。でも、確かにそう言われたの』

そこまで書いた時、ユカリはもう一つの不思議なことを思い出した。

あの場所では、何故か話すことができた。

けれどクロノスは、あの場所でしかしゃべれないと言っていたし、実際それは当たっていた。

そのことを（だいぶマシになったギリシャ語で）知らせると、アキレウスはまた難しそうな顔をしてしまった。

ユカリの想像通り、普通では考えられないことなのだろう。

散々うなつたアキレウスに告げられたのは、しかし意外な言葉だった。

「無理矢理考えるなら、やっぱりタルタロスだってことだろうな。

あそこは基本的に、ゼウス以外の神の力は及ばないって言ったたろ？ もしかしたら、それでヘラの呪いも一時的に解けたのかもな」  
『そっか……』

仕方がないと自分自身に言い聞かせるものの、がっかりするのは止められない。

アキレウスの言うことが本当ならば、しゃべるためにはタルタロスに行かなければいけないことになる。しかし、行ってもいるのはクロノスだけだ。

ユカリが会いたいののはクロノスではなく、アテナ。行っても意味がない。

しょんぼりしながらぐりぐりと返事を書いていたユカリの頭に、ぽんと大きな手が乗った。

反射的にばしりと払い落としながら振り仰ぐと、アキレウスが温かい目で笑っている。

「心配するなつて。その呪いも、そのうち解く方法がわかるだろ」

『……触らないで』

「はいはいはいはい」

『誠意がこもってない』

「心からこめてるっつーの」

そんな言い合いも、もう何度目だろうか。

毎回毎回繰り返し返されるおかげで、ユカリが操る文句のバリエーションもずいぶん増えた。

まあ、それを教えてくれるのもアキレウスなのだが。意地悪なのか優しいのか、よくわからない。

けれど、泣きそうになる度にこうしてくれるのだから、きっと優しいのだろう。

少しだけ心が軽くなるのを感じながら、ユカリはそれを誤魔化すように、また文句を羊皮紙に書いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7303x/>

---

の女神と の娘

2011年10月28日16時29分発行